

子どもの本だな 66

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

空とぶ船と世界一のばか

アーサー・ランサム 文 神宮 輝夫 訳
ユリー・シュルヴィッツ 絵 (岩波書店)

むかし、ある夫婦に3人の息子がいて、末息子は世界一のばかといわれていました。「空とぶ船を持ってきたものを王女と結婚させる」というおふれを見て出かけたばかむすこは、おじいさんに親切にしたお礼に、空とぶ船をもらいました。宮殿へ飛んで行く道すがら、世界中の音を聞く男や、あつという間に遠くまで走れる男、大食い男など不思議な力を持った7人を船に乗せ王さまの宮殿に降り立ちました。ところが王さまは「食事が終わるまでに命の水を持って来い」「牛の丸焼き12頭と40釜分のパンを食べろ」と次々に難題を命じ、ばかむすこを追い返そうとしました。

大胆な構図で躍動感あふれる絵はお話の雄大さをあらわし、無邪気で親切な主人公が幸せになるという結末に子どもは満足を覚えます。読んでもらえば4、5歳から。(西村)

ハヤ号セイ川をいく

フィリパ・ピアス 作 足沢 良子 訳
エドワード・アーディゾーニ 絵 (講談社)

ある朝、セイ川に面したデビッドの家の庭先に、カヌーが流れ着きました。それは上流に住むアダム・コドリングのものでした。

窮迫した暮らしを送るコドリング家には隠された宝の言い伝えがありました。「…一輪のぼらのもとへ水をこえ 宝は運ばれた…」デビッドとアダムは1篇の詩を手がかりに宝探しを始めました。カヌーでセイ川を探索し、川岸を掘ったり、古い建物を調べたりし、ついに、古い水路で橋に刻まれたぼらの紋章を見つけました。紋章を押すと石が動き、穴が現れたのですが、そこには何もありませんでした。宝は何者かに持ち去られていました。

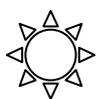
1篇の詩を頼りに、宝の隠し場所に近づいていく過程、宝を狙うスミス氏、消えた宝の行方と、最後まで物語にひきつけられます。暮らしのために宝を見つけたいと焦るアダム、それを支えるデビッドと、2人の内面も巧みに描かれています。10歳位から楽しめます。(竹内)

4月	5月	4・5月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
11日	16日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
18日	23日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
25日	30日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

<お知らせ>

**えほん・おはなしの本を
よんで、スタンプラリー
をしよう!**

☆ 問題に答えて
スタンプを集めよう!
たくさん集まったら、
プレゼントが
もらえるよ!



* 子ども対象の
スタンプラリーです。
期間は6月30日(日)まで。

『直島誕生 過疎化する島で目撃した「現代アートの挑戦」全記録』 秋元 雄史 著

ディスカヴァー・トゥエンティワン 399頁 2018年7月刊 1,600円 (請求記号) 709.1

瀬戸内海に浮かぶ島、直島は、「現代アートの聖地」と呼ばれ、年間約72万人もの観光客が世界中から訪れる。過疎化が進む静かな島がどのようにして現代アートの島となったのか。本書は、1991年から15年間、直島プロジェクトの主担当として現場を率いた著者の回顧録である。

91年、当時35歳だった著者は、偶然見つけた福武書店（現ベネッセ）の求人を書きつけかけに入社、まだ初期段階だった「直島プロジェクト」に学芸員として加わった。

92年、建築家・安藤忠雄設計の「ベネッセハウス・直島コンテンポラリーアートミュージアム」が開館する。様々な企画展示を手がけていくが、突如、室内展示替えが禁止となってしまふ。そこで著者は、ベネッセハウスの庭や海岸、キャンプ場など野外を使用した展覧会の企画を考え、94年に、作家11名の屋外彫刻展を開催した。この展示から、草間彌生「南瓜」などの常設展示が徐々に増え、直島アートを作り上げるきっかけとなる。97年に始まった、村の空き家を改修改造し、建物そのものをアート作品にする「家プロジェクト」では島民も参加し、01年の「スタンダード展」では、直島のほぼ全域が会場となった。島はアートの溢れ、島民との距離も縮まり、島全体が活性化していった。そして04年、直島アートの集大成「地中美術館」が開館する。

「モネの『睡蓮』を直島に飾る」。福武氏の一言で、『睡蓮』を飾るために造られたのがこの地中美術館だ。印象派のモネと現代アートを関連づけて形にした構想過程や、展示作家をクロード・モネ、ウオルター・デ・マリア、ジェームズ・タレルの3人だけに絞った経緯、『睡蓮』の最適な展示方法など、開館まで試行錯誤する著者の様子が詳細に描かれており、5年前、何の予備知識もないまま地中美術館を訪れ、空間すべてにただただ圧倒された私にはとても興味深かった。「直島を文化の島にしたい」という福武氏の思いから始まった直島プロジェクトは、今や瀬戸内中の島々を巻き込んで、島をアートの巡る芸術祭が開かれるまでになった。今年はその3年に一度の瀬戸内芸術祭の年だ。著者や福武氏の思いが詰まった直島を、今年はより深く楽しめそうだ。

(池之上)

毎週土曜日に「おはなしの時間」を開いています。

- ・4歳～2年生 11:00～
- ・3年生～中3 11:30～

4月のおはなしは「花さかじい」「雌牛のプーコラ」「三まいの鳥の羽」などを予定しています。詳しくはプログラムをご覧ください。

- *カレンダーの×印は休館日
- *■は館内整理日
返却のみ受付(10:00～17:00)
- *開館時間は10:00～18:00
金曜日は20:00まで開館

4月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

5月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

地下水

4月から文化会館（あすかホール）と図書館を兼務することになった。席はあすかホールに移動し、あすかホールの業務に支障のない範囲で、図書館のおはなしの時間や、園・学校訪問、移動図書館等担当することになった。利用者の方々には、本について様々なことを教えていただいた。本来は司書として利用者の方々に本を紹介する立場なのだが、教えていただくことの方が多かった。「これ面白かったよ」と差し出されたのが、ショーペンハウアーの『読書について』。借りてはいるが、読めないままに期限が過ぎてしまいうさだ。何人かの中老年の方から、「若いときに読んで忘れられない」「一番印象に残っている」と教えていただいたのがパール・バックの『大地』。これも読もうと思いつきながらまだ読んでいない。移動図書館で、利用者さんがお友達に熱心にすすめておられたのが、藤原ていの『流れる星は生きている』。戦争末期の過酷な体験の重みに圧倒されつつ、著者に手を差し伸べてくれる人々がいたことに希望を見出すことができた。

若い司書たちには、自分を枠に閉じ込めず、利用者の方たちと言葉を交わし、時代や国にとらわれず多様な本を通じて自分を耕してほしいと願っている。

(片木)

